

# 小金井中学校における教育実習の特色と

## 学生の「研究課題への意識」

### —学部との連携を視野に入れた教育実習プログラムの検証に向けて—

太田 伸也 石井 健介

小金井中学校での教育実習における特色が教育実習生の「研究課題への意識」の高まりに効果的に機能しているかを、平成26年度、27年度に本校で基礎実習（3年次）を経験した教育実習生85名への調査によって把握することを試みた。85人中58人（68%）が学部での事前指導や教科教育法関連科目での授業の一環として本校での授業観察を教育実習前に経験しており、ほとんどの場合に「影響を受けた」と回答していることがわかった。また、「全体研究授業」や「保健室勤務」等の経験が、研究課題への意識の高まりにつながっていることが推測された。

〔キーワード〕 教育実習 事前指導 全体研究授業 保健室勤務

#### 1. 研究の目的

本稿の目的は、小金井中学校での教育実習における特色が教育実習生の「研究課題への意識」の高まりに効果的に機能しているかを検討することである。とりわけ、本校独自の特色から「(I) 教育実習の前に事前指導や学部の教科教育法授業の一環として本校での授業観察を経験している」「(II) 教育実習生全員で全体研究授業に取り組む」「全員が保健室勤務を経験する」に着目する。そのために、本校が取り組んだ教育実習をテーマとする研究（東京学芸大学附属小金井中学校『研究紀要』.1967, 1987,1989,1991）を振り返るとともに（I）（II）の特色を確認し、教育実習生への調査によって「研究課題への意識」とその変化を把握する。

#### 2. 本校における教育実習生指導 —「教育実習」をテーマとする過去の研究から

附属学校の重要な使命の一つである教育実習生の指導について、本校では実際の指導と並行して、研究主題中に「教育実習（または教育実地研究）」を掲げて研究的・実証的に取り組んできた経緯がある。研究紀要によれば、次のようにテーマ設定がなされ、実践的な研究が行われた。以下に概略を述べる。

1 期間 昭和58（1983）年～平成元（1989）年

2 研究主題 教育実地研究生指導のカリキュラムとその実践

3 研究の目的 「教育実地研究における教科指導の一つのあり方を明らかにする」

そのために

- ① 各教科の目指す教育実地研究生像を明らかにする。
- ② 各教科の教育実地研究生指導の目標を明確にし、指導内容、指導の方法を明らかにする。
- ③ 大学学部での指導との関連を明らかにする。

4 研究の方法

① 研究対象

中学校教員養成課程（B類）学生の3年次実習を主たる対象とし、必要に応じて一部小学校教員養成課程（A類）学生の4年次自由実習を補助的に対象とする。

② 各教科共通に次の指導内容の抽出

a 到達目標の検討

b 研究目的の焦点化

ア 教育実地研究生指導の方針と重点の明確化

イ 各教科の望ましい授業の検討、授業観・教材観の確立

c 指導内容の骨子と教育実地研究生の到達段階の検討

d 文献研究による指導計画の要素の抽出

## 5 研究の結果と考察

### ① 教育実地研究生の指導の到達目標

各教科に共通する教育実地研究生の到達目標として「生徒の実態を考慮した授業設計ができる」を設定し、「生徒の実態」「授業設計」の意味を各教科で掘り下げることによって、教科ごとのより具体的な到達目標が表現できるようにした。

参考までに2つの教科の到達目標を示すと次のようになる。これ以外の教科においても、教科の特質を加味しつつ、同様の方向性をもったものが掲げられている。

【国語科】教師が設定した目標達成のための形成過程が踏まえられていると同時に、教師・教材・生徒が関わり合い、啓発し合うことによって思考が深まっていくことを目指した授業設計ができる。

【数学科】知識の伝達を重視する授業、教え込む授業から、生徒が問題意識をもって問題に取り組み、それを解決していく過程で、目標としての知識や考え方を身につけていくことを目指した授業ができる。

上記に共通するのは、授業技術の習得ではなく、授業観そのものの変革を旨としていることであろう。実習生が実際に授業を担当する以前の段階で、オリエンテーションも含めて担当教科の授業を観察する機会を設け、その記録や分析に相当の時間を費やす理由も、そこにある。

### ② 指導計画の骨子、到達段階、指導内容の一覧

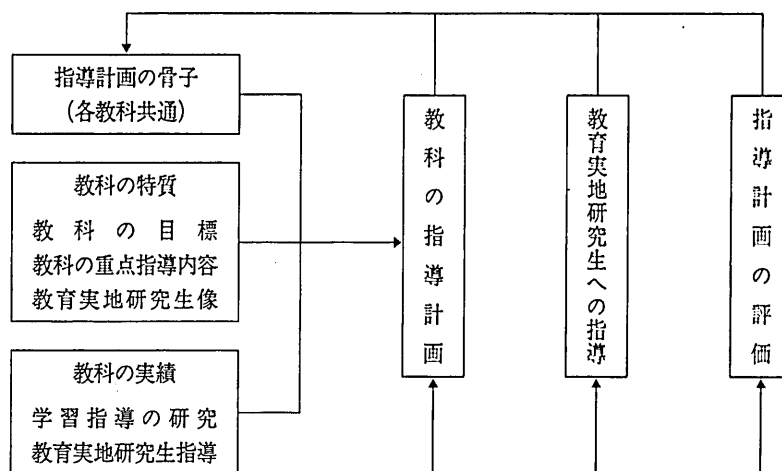


図1 (東京学芸大学附属小金井中学校研究部, 1987, p.7)

共通到達目標を踏まえ、各教科で作成するが、全教科に共通する指導の流れは図1のように示されている。まず、各教科でそれまでに蓄積してきた学習指導に関する研究や教育実習生の指導に関する研究を参考にして各教科の指導内容・指導方針を定めて指導計画を作成する。その計画に基づいて実習生を指導した結果をもとに、実習生の実態や生徒への指導結果の面から再度指導計画の骨子・各教科の指導計画の見直しを行い、修正するのである。

また、教科指導においては「目標・教材・生徒」という授業の3要素を教師が制御するという考えに基づき、「教材研究・指導計画の立案」「学習指導」「授業研究・授業参観」の3場面で、具体的な指導目標と指導内容をⅠ～Ⅲの3段階（この段階は通常3週間の実習期間の第1週～第3週の各週にほぼ該当する）のに分けて指導することとした。これらの各場面は互に関連し合うとともに、各段階も相互に関連を持ちながら次の段階へ進んでいくものとし、このような場面と段階を経

て実習生の能力の高まりを期待した。下の図2がそのような相互関連を表す。

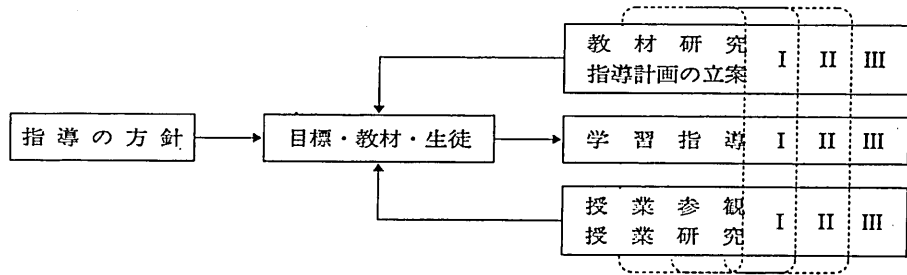


図2 (東京学芸大学附属小金井中学校研究部, 1987, p.8)

### ③実習生指導の実際

各教科で作成した実習生指導の方針・到達目標・内容などを、指導計画にしたがって指導していくわけであるが、その指導の流れを図示すれば、次の図3のようになる。この図は、指導の全体像を示すと同時に、1研究生が1時間の授業を担当する際にどのような学習の場があるかを示すものとなっている。

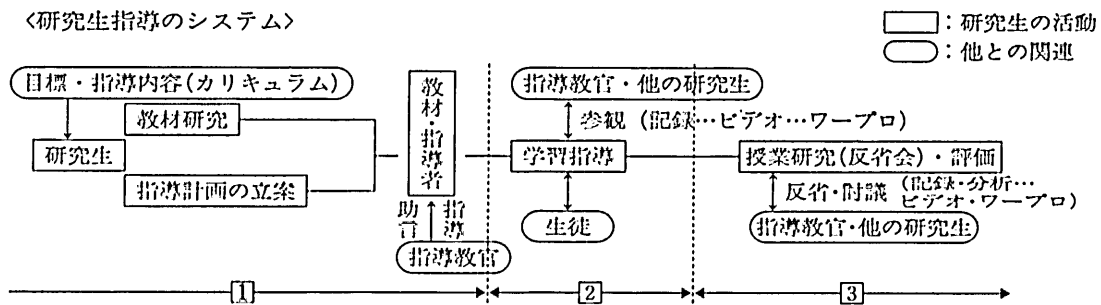


図3 (東京学芸大学附属小金井中学校研究部, 1991, p.5)

①は準備する場面であり、この場面で実習生が指導計画を作成し、教材研究を行って指導教員の指導助言を求める。ここでは、研究生1名で行う場合もあるが、数名の実習生が共同して行う場合もある。教科の通常の授業の場合は前者、学級の道徳の場合は後者であることが一般的である。

②は実際の授業の場面であり、授業者(実習生)と生徒との相互作用の中で授業が進行し、生徒には学習目標が達成されれば、学習が成立したこととなり、授業者にとっても、生徒の様々な反応から学習し、研究が成り立つ。ここでは指導教員が常に参視し、他の実習生、特に同学年同教科配属の実習生は必ず参加して参視記録をつけたり、ビデオ録画等を行っている。

③の場面では、指導教員、他の実習生の参視記録、ビデオ等をもとに、授業者を中心として授業研究会(反省会)を行う。できる限り他の実習生も参加し、授業を評価するとともに、より望ましい授業へ改善の方向性を探り、次時にいかすことを目指す。

なお、教科全体で行われる研究授業(最終段階)では、共同で準備場面から始める場合が多く、教科の全実習生と全教員が反省会に参加する。多くの場合、大学の指導教員も招かれる。

さらに、本校独自の取り組みとして、教科輪番による全体研究授業がある。その年の担当となった教科が、1学級1時間の授業を行い、全実習生、全教員の参加のもとに研究授業と授業研究会が行われる。中学校以上では教科の独自性が強調されるため、教科の枠を超えた授業研究が行われることが少ないが、本校ではあえてこのような全体研究授業を設定し、実習中に学んだ「授業観」に基づき、教科の枠を超えた討議が活発に行われている。

### ④各教科における実習生指導の基本方針とその共通性

教科でどのような実習生像を目指すかによって、指導の内容や方法が定まる。研究授業の指導案や

授業研究会の記録などから、実習生指導の基本方針について共通するものを拾うと次のようになる。

A 教科の特質とみられる基礎・基本の内容を修得させる。

- ・教科教育の意義や目標
- ・教科指導における知識技能
- ・教員としての資質 など

B 授業観・教材観の確立を求める。

- ・導入の方法や発問のありかた

C 生徒の実態に応じた指導を求める。

- ・学習課題の持たせ方
- ・実態に応じた指導過程

以上の3項目は、各教科共通に実習生指導の柱と考えられており、平成元年の研究協議会においても、教科分科会の協議主題にほぼ共通に埋め込まれていた。

大学の実習カリキュラムの改定を受けて部分的に変更されたところはあるが、今日に至るまで、本校の実習生指導における基本方針及び指導過程は、ここに述べたものを踏襲している。

### 3. 本校における教育実習の特色から

(I) 事前指導や学部の教科教育法授業の一環として本校での授業観察を経験していること

附属小金井中学校では、9月に「中等教育教員養成課程 (B類)」3年次学生を主とする教育実地研究 (基礎実習) を3週間、10月に「初等教育教員養成課程 (A類)」4年次学生を主とする教育実地研究 (選択実習) を2週間行っている。大学のキャンパス内にあることから、このほかにも、教育実習事前事後指導における授業参観、大学の授業時間での授業参観、教職大学院生の研修等の場等、年間を通して多くの学生・院生が訪れる。このような学部・大学院との連携の状況を表1に示す。

表1 学部・大学院との連携の状況

	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度(1月末)
事前事後指導 教科数 担当教員数 実施回数	7教科 9名 16回	7教科 9名 12回	8教科 11名 14回	9教科 10名 15回	8教科 11名 17回	6教科 8名 11回
大学学部授業協力 教科数 担当教員数 実施回数	7教科 11名 11回	5教科 11名 9回	8教科 8名 10回	5教科 8名 12回	8教科 13名 16回	6教科 15名 13回
大学院授業協力 教科数 担当教員数 実施回数	4教科 4名 4回	3教科 5名 5回	4教科 4名 3回	4教科 7名 4回 教職大学院研修生1名1年間	3教科 6名 15回	3教科 8名 3回 教職大学院研修生1名半年間
卒論及び修論協力	記録なし	—	—	4件	6件	1件
主題研究テーマ	課題意識を高め、自らの問いを深める教育課程づくり	生徒一人ひとりを、学び合いにより伸ばす授業の創造	『思考力・判断力・表現力等』を育成するための指導とその評価			学ぶ意欲を持ち、追及していく生徒の育成
研究協議会・公開授業研究会への本学学部生・院生の参加数	分類集計せず	—	63名	101名	119名	59名

(II-1) 教育実習生全員で「全体研究授業」に取り組むこと

3年次学生を対象とする「基礎実習 (9月)」では、各教科で行う研究授業とは別に、「全体研究授業」を期間中に1回行っている。これは、1つの教科が代表で研究授業を行い、全実習生と全指導教員、大学連絡教員、当該教科の関連する大学教員が参加する授業研究会である。担当教科は年ごとに輪番制をとっている (例えばH23年度は美術、H24年度は保健体育、H25年度は技術・家庭 (技術分野)、H26年度は技術・家庭 (家庭分野)、H27年度は英語)

この取り組みは、教育実習生の授業を全実習生で参観し、その授業実践について検討を加えることで

成果を確認し、今後の課題を明確にすることが目標である。参観者も単なる授業の感想にとどめず、授業で表出した事実をもとに質疑を行うこと、そのために各自が事実を綿密に観察し、授業記録をとることが求められている。次に当日の研究会の概要を示す。これは、指導教員にとっても、教育実地研究の成果を振り返り検討する場となっている。

日時 9月〇日 (〇) 13:20~16:30  
授業参観 授業13:20~14:10  
(教科) 〇〇科 (授業主題) □□□ 対象 〇年〇組生徒  
教科ごとの協議 (大教室) 14:15~14:45  
 研究生は教科ごとに協議を行い、全体協議の場で発表する参観評をまとめる。  
全体協議 (大教室) 15:10~16:30  
 開会→学校長挨拶→大学指導助言者紹介  
 協議 ①授業者自評 ②教科代表から参観評 ③質疑応答、協議  
 講評 ①本校教員 (〇〇科教員, 学級担任)  
 ②大学教員 (〇〇科教育教員, 実習連絡教員)  
 副校長挨拶→閉会

## (Ⅱ-2) 全員が「保健室勤務」を経験すること

保健室勤務は、保健講話とは別に、教育実習生を6~12人の小集団に分け、養護教諭が1校時分の指導を保健室で行っているものである。これは、実習生にとって、養護教諭の役割や保健室運営の実際を臨牀的に体験することを通して理解する貴重な場になっている。

具体的には、「生徒の保健室利用」「学校で行う救急処置」などのほかに、演習として「健康相談」のロールプレイを行っているのが特色である。実習生が、事例に沿って「生徒」「養護教諭」「担任」の3グループに分かれ、代表者がグループの相談をもとにロールプレイを行い、その観察や記録をもとに、養護教諭や担任の望ましい対応を検討・協議している。実習生が就職してからの学級経営も考え、健康相談や教育相談について、学校全体で連携し生徒理解を深め、教職員全員が役割分担して行うものと伝えることがねらいである。

## 4. 教育実習生の「研究課題への意識」とその変化

### 4.1 調査内容と方法

小金井中学校での教育実習における特色が教育実習生の「研究課題への意識」の高まりに効果的に機能しているかを検討するために、教育実習生への調査を実施した。

調査用紙を図4に示す。先に示した特色の「(Ⅰ) 事前の授業観察の経験」は、質問項目のⅠに対応している。また、「(Ⅱ-1) 全体研究授業」に関しては、主として質問項目のⅡ(カ)(キ)(ク)(ケ)に対応し、「(Ⅱ-2) 保健室勤務」に関しては主としてⅡ(ス)に対応している。

調査は、教育実習最終日に図4を配付し実習日誌と一緒に提出するという方法で実施した。質問項目のⅡは、それぞれの観点について、教育実習終了後に自分の意識を振り返り、実習後と実習前の自分の意識を比較して記入することになる。ここでの意識の数値化は主観的ではあるが、実習後と実習前の自分の変化についての傾向はその差に表れると考えられる。

今回は、平成26年度、27年度の2年間の調査結果を整理し、分析、考察する。調査は平成26年度、27年度の「基礎実習(9月)」に本校で取り組んだ教育実習生全員を対象とした。調査数は平成26年度が42人、平成27年度が43人、合計85人である。以下の集計ではこの85人の回答を合わせたデータを用いる。

今後の教育実習等のための資料としますので、以下の項目に回答し、教育実習日誌と一緒に提出してください。  
 なお、回答内容が研究以外の目的で使われることはありません。

教科等 \_\_\_\_\_ 学級 \_\_\_\_\_ 学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

I. この教育実習以前の研究・学習について該当するものの記号(ア～エ)に○をつけ、関連する内容を記入してください。  
 また、自分にとって「1 影響を受けた」「2 あまり影響を受けなかった」を選択してください。  
 6月27日の本校でのオリエンテーションを除きます。

ア. 事前指導で附属小金井中学校の授業を参観したことがある。  
 参観した授業等 ( ) 参観回数 ( ) 影響 ( 1 2 )

イ. 事前指導以外の学部・大学院の授業で、附属小金井中学校の授業を参観したことがある。  
 参観した授業等 ( ) 参観回数 ( ) 影響 ( 1 2 )  
 大学/大学院の授業科目名 ( )

ウ. 上記ア、イ以外で、附属小金井中学校の授業を参観したことがある。  
 参観した授業等 ( ) 参観回数 ( ) 影響 ( 1 2 )  
 具体的にどんな場面ですか ( )

エ. オリエンテーション以外では附属小金井中学校の授業を参観したことはない。

II. この教育実習を通しての「自分の研究課題への意識」の変化について伺います。教育実習前と実習後の自分の意識に近いものを1～4の数字で記入してください。また、具体的な例などがあれば備考に記入してください。

1 強く意識している 2 意識している 3 あまり意識していない 4 全く意識していない

教科指導

	実習前	実習後	備考(何か具体的にあれば記入してください。なければ空欄のまま)
(カ) 自分の専門教科の学習指導に関して			
(キ) 自分の専門外教科の学習指導に関して			
(ク) 教科指導の場面での生徒理解に関して			
(ケ) 授業研究の重要性に関して(全体研究授業を通して)			

教科外指導

	実習前	実習後	備考(何か具体的にあれば記入してください。なければ空欄のまま)
(サ) 学級の指導に関して(学級経営レポート等を通して)			
(シ) 道徳の指導に関して			
(ス) 学校保健についての理解に関して(保健室勤務を通して)			
(セ) 部活動、学校行事等に関して			

III. この教育実習前後で教職志望の意識はどうか。5～1の数値で回答してください。

5 とても強い 4 強い 3 志望している 2 迷いがある 1 志望しない

実習前 ( ) 実習後 ( )

図4 調査用紙

#### 4.2 教育実習前の授業観察(調査項目I)

事前指導や学部の教科教育法等の授業の一環として、本校での授業を参観した経験があるかどうか、また、「影響を受けたかどうか」を調べた。

表Ⅰに示すように、85人中58人（68％）が本校での授業観察を教育実習前に経験しており、ほとんどの場合に「影響を受けた」と回答していることがわかる。

表Ⅰ 教育実習前の授業観察の経験

Ⅰ オリエンテーション以外での事前参観	
参観したことがある	58
参観したことはない	27
計	85

ア事前指導		ア事前指導での参観	
1回	41	1影響を受けた	49
2回	15	2受けなかった	7
計	56	計	56

イ他の授業

イ他の授業		イ他の授業での参観	
1回	17	1影響を受けた	18
2回	1	2受けなかった	1
計	19	計	19

ウその他での参観	
個別に依頼	2
1影響を受けた	2

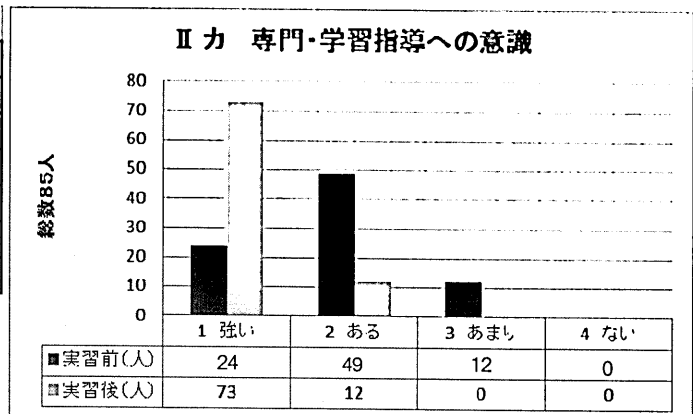
#### 4. 3 研究課題への意識とその変化（調査項目Ⅱ）

設問は、教育実習を通しての「自分の研究課題への意識」の変化について、教育実習前と実習後の自分の意識に近いものを下の1～4の数字で記入するというものである。また、具体的な例などがあれば備考に記入することとしている。

1 強く意識している    2 意識している    3 あまり意識していない    4 全く意識していない  
以下に、調査項目ごとに、全体の傾向をあらわす表と図、および個人の変化をあらわす図を示す。

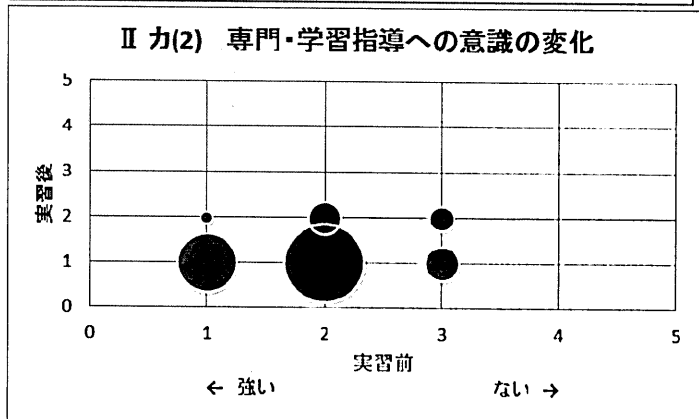
「表Ⅱカ」の数値「42」は、実習前の意識は「2」だったが実習後は「1」であると回答した学生が42名であったことを表している。また、「Ⅱカ」のグラフの一番左は、「1」と回答した学生数が実習前は24人であったが実習後は73人であることを表している。「Ⅱカ(2)」のバブルチャートは表Ⅱカに対応しており、(実習前, 実習後) = (2, 1) の大きな○印は表Ⅱカの「42」人を表す。○の位置が右下にある方が実習前より実習後の方が意識が高いことを表すと解釈できる。

表Ⅱカ 専門・学習指導への意識						
		実習後 平均 1.1				
		1 強い	2 ある	3 あまり	4 ない	計(人)
実習前 平均 1.9	1 強い	23	1			24
	2 ある	42	7			49
	3 あまり	8	4			12
	4 ない					0
計(人)		73	12	0	0	85



(カ) 自由記述

より具体的な指導をころがるようになった。  
やはり、教える内容の専門性は教育を行う上で重要だと考えている。  
元から意識はしていたが、実践を通してより具体的に見えてくるものがあり、意識もより強いものになった。  
目的を定め教材作り、教材選びをする大切さを実感した。  
発問に関する工夫および準備、また授業中の展開の中で求められる対応  
多様な読みと拡大解釈の対応について  
生徒にどのような発問をすればよいのか、どうすればより理解してもらえるのかということ意識するようになりました。  
実際の授業を通して具体的なものになった。  
教科で専門性を高める必要があると思った。  
実習中に見つけた課題があったため。  
授業をスムーズにできていればなんとかなると思っていたが、生徒の反応、生徒の主体性を気にするようになった。  
生徒の関心の引き方を特に考えるようになった。  
知識も含め、教材研究が足りないと感じた。  
なぜ中学生という段階で専門教科を学校という場で学ぶ必要があるのか。



		実習後 平均 2.0				
		1 強い	2 ある	3 あまり	4 ない	計(人)
実習前 平均 3.0	1 強い	1				1
	2 ある	7	3			10
	3 あまり	5	46	11		62
	4 ない	2	6	4		12
	計(人)	15	55	15	0	85

(キ) 自由記述

他教科の授業をあまり見ることができず、自分の専門外の教科の指導に関してイメージを膨らませることはあまりできませんでした。

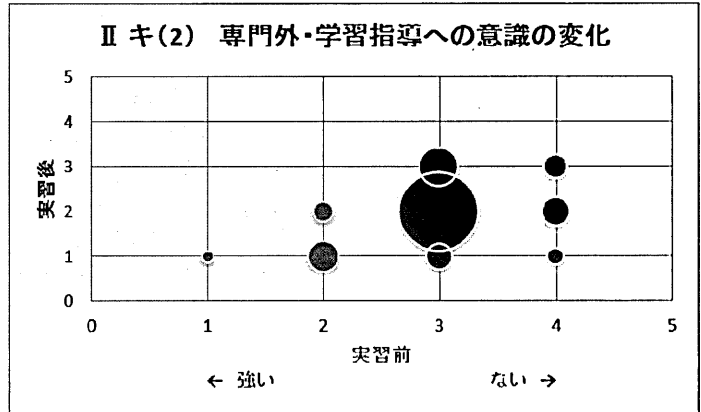
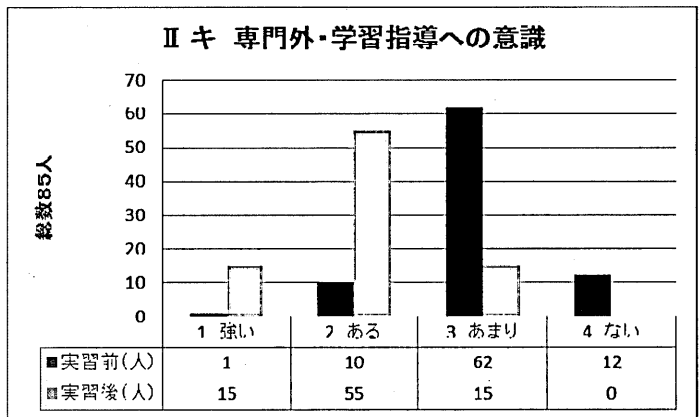
他教科の授業もいくつか見学したが、それぞれの教科の特徴ゆえの難しさがあるように感じた。

全体の研究授業を通じ、英語の授業にも生かせる場所があった。

数学や他の教科では、何をどう扱うのかに興味を強くもつ小学校のように1人の教員が多くの教科を教えるわけではないので、他教科の学習指導はあまり重要視しなくてもよいと考えている

教材や単元のめあての設定  
研究授業を通じ、学ぶことも多いと感じた。  
全体研究授業の存在が大きかった。  
他教科との関わりについて  
他教科と美術の話をつなげてより面白い授業にしたいと思った。

道徳教育  
養護的観点から他教科を見ることの重要性を学んだ。



		実習後 平均 1.2				
		1 強い	2 ある	3 あまり	4 ない	計(人)
実習前 平均 2.4	1 強い	7				7
	2 ある	36	6			42
	3 あまり	23	10	1		34
	4 ない		2			2
	計(人)	66	18	1	0	85

(ク) 自由記述

短く適確な指示の重要性を確認した。

生徒理解をすることによって、授業の構成や盛り上がりなどに大きな影響があることがわかった。

生徒の発言に対する反応や評価を疎かにしてはいけないと分かった。

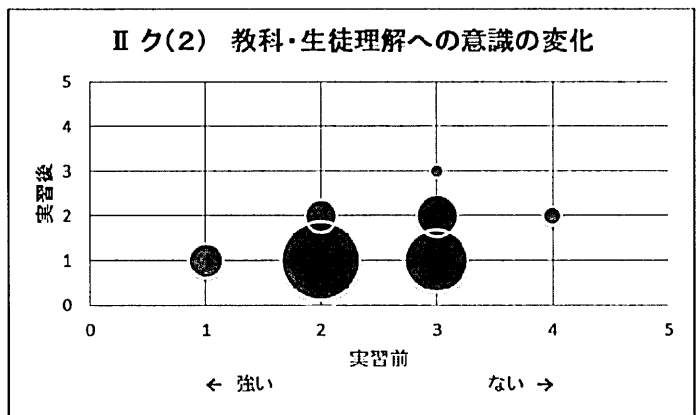
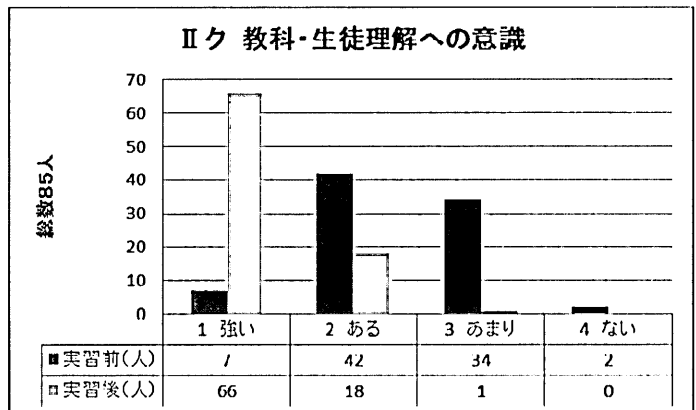
生徒の実態に即した授業展開、学習展開、学習活動の工夫  
実際に授業を行ってみると、生徒の実態がよくわかり、それに沿って指導案を変えていくことができました。

机間巡視による生徒の意見の把握  
机間指導の際に生徒の反応を見ることができ  
学校教育として必要不可欠である

今まで授業を通していくつか指導案を書いたが、生徒の実態の把握無しでは授業の計画を立てることはできないことを改めて感じた。

一方的ではなく、生徒と相互のやりとりができると授業の展開も良い。

生徒に対する理解が指導につながると感じた。  
生徒の反応を予想するのに必須  
男女差、生徒の性格や能力に合わせた指導。  
一人一人の生徒の立場・視点になって授業を考えることが大事だと思いました。





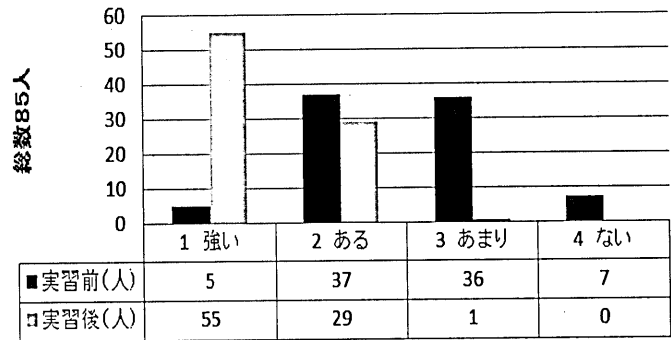
表Ⅱケ 授業研究への意識

		実習後 平均 1.4				
		1 強い	2 ある	3 あまり	4 ない	計(人)
実習前 平均 2.5	1 強い	5				5
	2 ある	27	10			37
	3 あまり	21	14	1		36
	4 ない	2	5			7
	計(人)	55	29	1	0	85

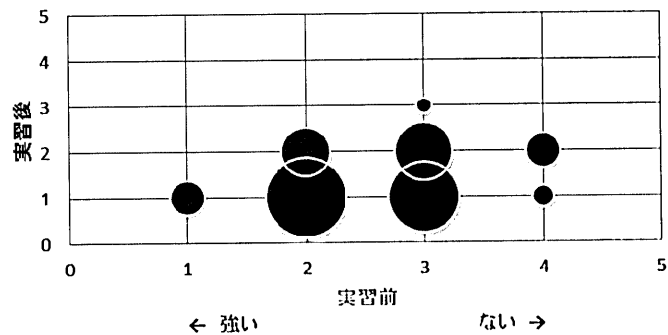
(ケ) 自由記述

綿密な時間設定、多様な反応予想の必要性  
 他の教師の指導を見ることで自分自身との共通点を改めて知ることができ、自分の授業の改善に役立てることができるとわかった。  
 他教科から指導内容を見ることが重要性を知った  
 他学科の視点の重要性  
 授業後の意見交流がとても勉強になった。  
 授業構成、時間配分の大切さを学んだ。  
 自分では見えないことを多く知れ、多くの教科の意見が教科色が出ていておもしろかった。  
 さまざまな教科の視点から観ることで、新しい発見が生まれ、よりよい授業が作れると感じました。  
 各教科の視点から語られる意見がとても勉強になった。普段はなかなか他教科と意見を言い合う機会がないので有意義だった。  
 各教科ごとの視点というものを教職員全体で共有できたら理想であると思う。  
 新たな視点からの意見を得ることができる。  
 参考になる面が多かった。  
 自分の授業を多角的に評価してもらう重要性  
 他教科からの視点の新鮮さ・大切さを学びました。  
 他教科の内容を知ることが大切と感じた。  
 保健だよりの作成で、載せる以上の知識が必要。

Ⅱケ 授業研究への意識



Ⅱケ(2) 授業研究への意識の変化



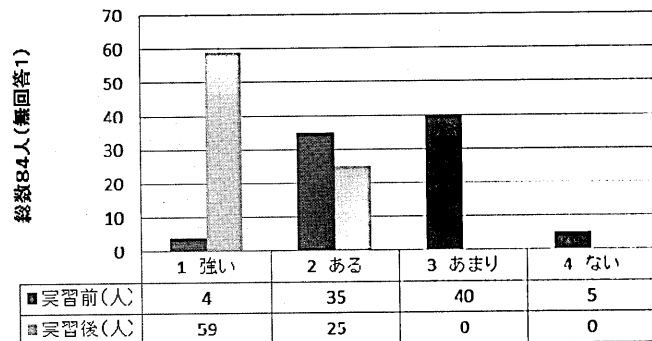
表Ⅱサ 学級指導への意識

		実習後 平均 1.3				
		1 強い	2 ある	3 あまり	4 ない	計(人)
実習前 平均 2.5	1 強い	4				4
	2 ある	27	8			35
	3 あまり	25	15			40
	4 ない	3	2			5
	計(人)	59	25	0	0	85

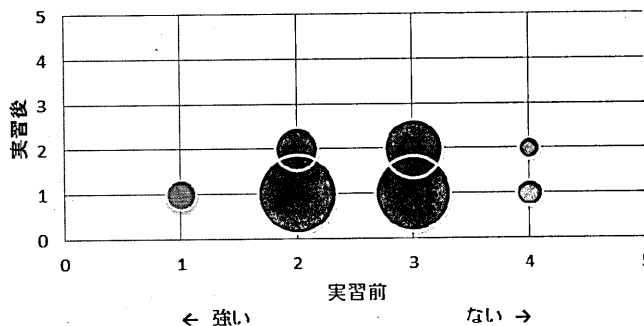
(サ) 自由記述

生徒1人1人を細かく観察していく事が大切であった。  
 集団の秩序、生徒の自主性を育てる指導  
 実際に生徒と関わることで、全体に働きかける指導だけでなく、1人1人に指導する大切さがわかりました。  
 様々な反応を総合し、冷静に分析する  
 学級の指導に関しては、生徒たちの日常的な様子をよく観察していることが重要なことであると学んだ。  
 学級のことを知る大切さを理解した  
 数少ない機会で見学生のどこを見るか  
 学級・学校を把握することは重要である。  
 学級で雰囲気づくりが授業にも大きく影響すること。  
 教師が口を出すことはほとんどなく、生徒の自主性が重視されていた。  
 見えている部分だけでなく、背景も考慮しなければいけない。  
 元々中学二年生は複雑な年頃であるので、どう接するか不安なところもあったのだが、実習を通してささいな声掛けが大事であることを学び、ケアをもっとしなければならぬと感じた。

Ⅱサ 学級指導への意識



Ⅱサ(2) 学級指導への意識の変化



		実習後 平均 1.7				
		1 強い	2 ある	3 あまり	4 ない	計(人)
実習前 平均 2.7	1 強い	3				3
	2 ある	11	16			27
	3 あまり	11	28	6		45
	4 ない	3	7			10
計(人)		28	51	6	0	85

(シ) 自由記述

より生徒の実生活に投影し考えやすい主題設定  
目標を明確にすること、そしてその目標を達成するためにど  
ういう授業風景にすればいいのかがしっかりと考えなければ  
いけないと実感しました。

雰囲気作り

何を考えさせたいか、そこに導く手順はどうするのか、難し  
いが手ごたえを感じた。

道徳をどう運営していくか

道徳の授業はその生徒たちの実態に合ったテーマを取り扱  
うことで意味のあるものになることが分かった。

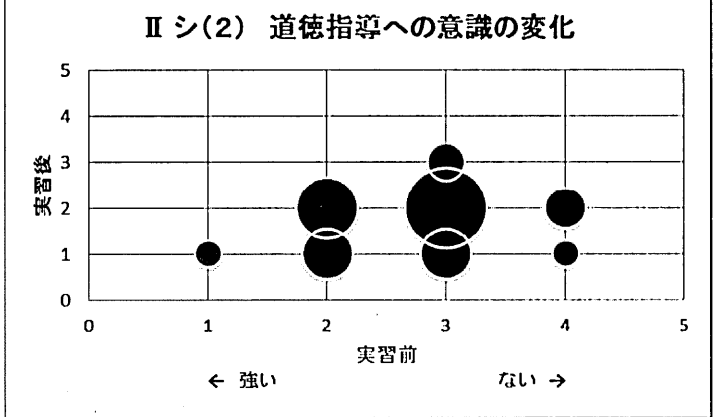
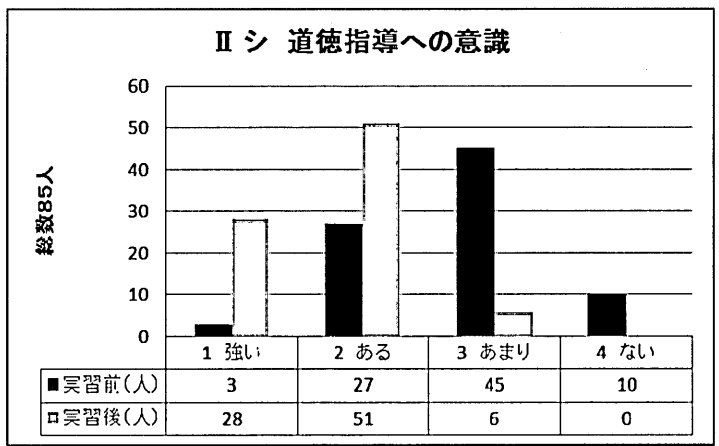
道徳の授業は資料を読んで感想を書くという型になりが  
ちだと思っていたが、工夫次第では生徒が主体的に参加で  
きるものができるということに気付いた。

道徳の授業の存在意義を理解した

生徒に何を考えてもらいたいのか、こちらの意図を明確にす  
ることの大切さを学んだ。意見の提示方法も工夫することが  
できた。

授業実践を通して重要さと難しさがわかった。

ねらいをしっかりとたてないと、あやふやな内容になってし  
まう。



		実習後 平均 1.9				
		1 強い	2 ある	3 あまり	4 ない	計(人)
実習前 平均 3.0	1 強い	7				7
	2 ある	6	7	1		14
	3 あまり	3	28	5		36
	4 ない	4	22	2		28
計(人)		20	57	8	0	85

(ス) 自由記述

保健についての理解は大切だが、保健と関係のない各教科の教  
員にとっては、それほど理解が重要なものではないと考えてい  
る。

保健室とタンニンの連携が重要であることを保健指導を通  
じて考えた

担任と保健室の連携の必要性

担任、養護教諭、部活の顧問、保護者など、たくさんの人と連  
携して生徒の理解や悩みを解決していくことが大切だと分か  
りました。

生徒の心と体の健康には教師全体が一丸となって配慮する必  
要性があることがわかった。

教員がいしきせねばならない常用事項の大きな1つであると感  
じた。

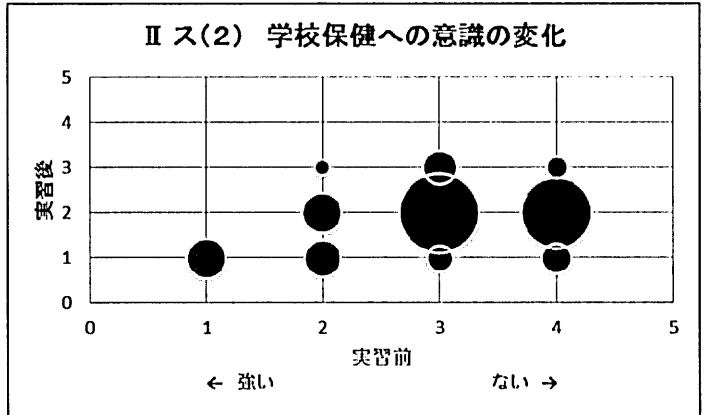
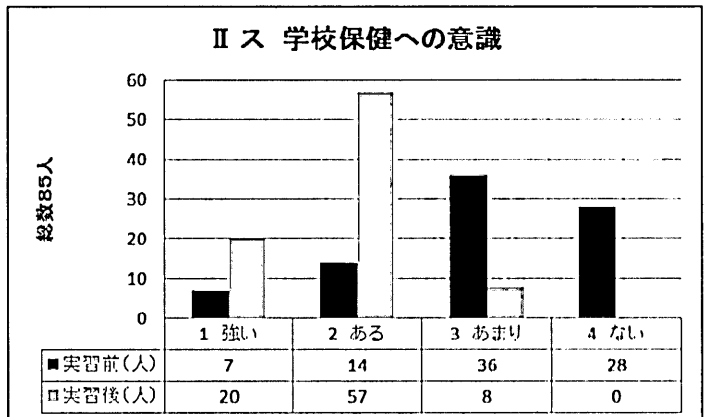
学校保健と学級担任がどのように関わっていけたら生徒をサ  
ポートできるだろうかという点を深めることができてよかつ  
た。

教員間での情報共有が必要である。

担任も保健室に通う生徒等の把握が大切であること。

特に心理的な面

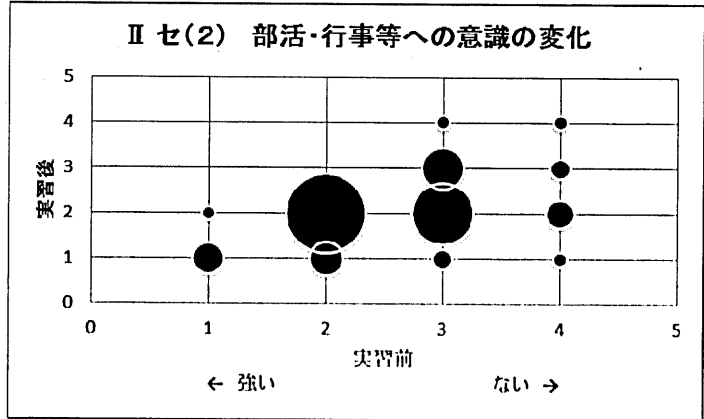
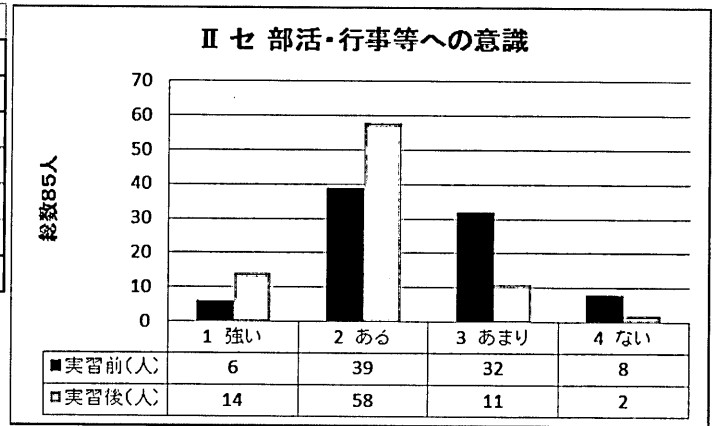
保健室の先生と担任との情報のやりとりが重要であることが  
分かりました。



表Ⅱセ 部活・行事等への意識						
		実習後 平均 2.0				
		1 強い	2 ある	3 あまり	4 ない	計(人)
実習前 平均 2.5	1 強い	5	1			6
	2 ある	6	33			39
	3 あまり	2	20	9	1	32
	4 ない	1	4	2	1	8
	計(人)	14	58	11	2	85

(七) 自由記述

部活動は見に行くことができませんでしたが、生徒の話を聞いていると、やはり学校生活の中で部活動は大きな割合を占めていると感じました。  
部活動に参加することができなかった。  
生徒にとってはたいせつなものだと思う  
協力体制、まとまらせるにはどうしたら良いかを考えることができた。  
学年合同委員会を通じて、委員会のクラスに与える影響を考えた。  
見学に行くことはできなかったが、行事に向けて準備を進めている様子を観察することができた。  
あまり行きたい部活がなかった  
今回たずさわることができなかったため。  
生徒の違った面がみられ、より生徒理解につながる。  
部活動内での人間関係の把握の必要性。

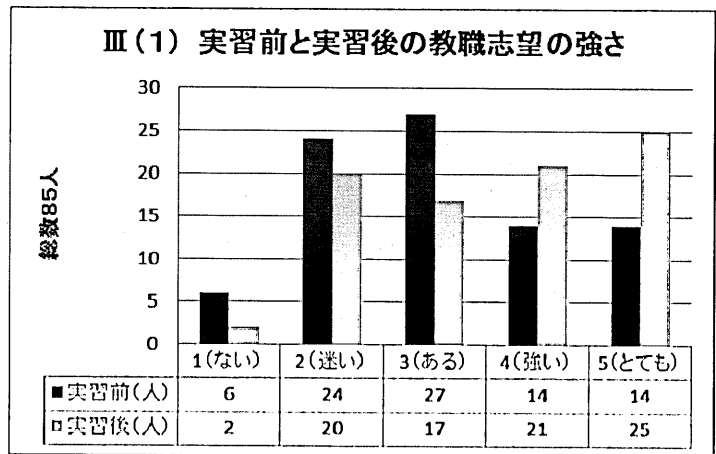


4. 4 教職志望の意識 (調査項目Ⅲ)

この設問は、教育実習前後で教職志望の意識がどう変わったかを5~1の数値で回答するものである。

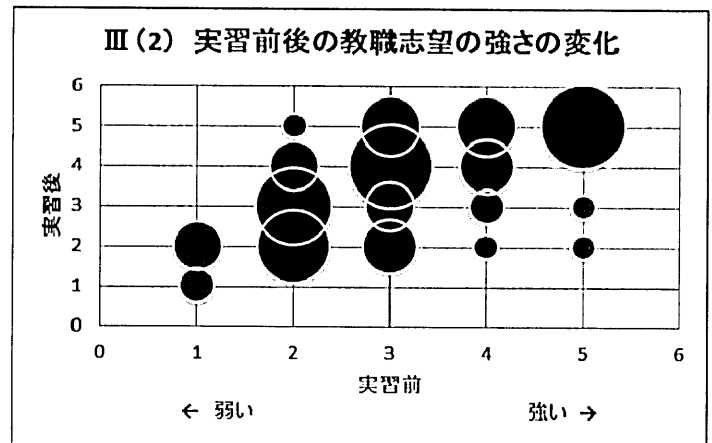
- 5 とても強い      4 強い
- 3 志望している      2 迷いがある
- 1 志望しない

ここでは、数値が大きい方が教職志望が強いことを表している。「Ⅲ(2)」のバブルチャートでも右上にある(上に動く)方が意識が高いことを表している。



表Ⅲ 実習前と実習後の教職志望の強さ

		実習後					
		1(ない)	2(迷い)	3(ある)	4(強い)	5(とても)	計(人)
実習前	1(ない)	2	4				6
	2(迷い)	9	10	4	1		24
	3(ある)	5	4	12	6		27
	4(強い)	1	2	5	6		14
	5(とても)	1	1			12	14
計(人)	2	20	17	21	25	85	



## 5. まとめと今後の課題

小金井中学校での教育実習における特色が教育実習生の「研究課題への意識」の高まりに効果的に機能しているかを、平成26年度、27年度に本校で基礎実習（3年次）を経験した教育実習生85名への調査によって把握することを試みた。

(I) 85人中58人(68%)が学部での事前指導や教科教育法関連科目での授業の一環として本校での授業観察を教育実習前に経験しており、ほとんどの場合に「影響を受けた」と回答していることがわかった。学部の授業時間内に本校での授業観察を取り入れるという、大学のキャンパス内にある附属学校としての特色が生かされている。

(II) 本校での教育実習後に実習前の自分の「研究課題への意識」を振り返り比較する調査からは、前章のように、どの項目でも「意識が高まった」と考えている学生が多いことがわかった。全体的な傾向をみるために、それぞれの項目について、実習前と実習後の数値の平均値とその差を求めると表2のようになる。

教育実習前に「3 あまり意識していない」「4 意識していない」が半数をこえている項目は、「キ 専門外の学習指導」「ケ 授業研究」「サ 学級指導」「シ 道徳指導」「ス 学校保健」であったが、いずれも実習後には、研究課題として意識するように変化している。とりわけ、「キ 専門外の学習指導」「ケ 授業研究」「ス 学校保健」については、「全体研究授業」への取り組みや「保

表2 教育実習前と実習後の数値の平均値とその変化

項目	実習前	実習後	変化
力 専門・学習指導	1.9	1.1	0.8
キ 専門外・学習指導	3.0	2.0	1.0
ク 教科・生徒理解	2.4	1.2	1.2
ケ 授業研究	2.5	1.4	1.1
サ 学級指導	2.5	1.3	1.2
シ 道徳指導	2.7	1.7	1.0
ス 学校保健	3.0	1.9	1.1
セ 部活・行事等	2.5	2.0	0.5

健室勤務」の取り組みを経験していることの影響が大きいと思われる。なお、「サ 学級指導」「シ 道徳指導」についても、それぞれ「学級指導レポート」「学級配当の実習生の協働による道徳指導への取り組み」の効果と思われる。(詳細については前章の各項目の表やグラフを参照)

(III) 実習後の自分の教職志望の強さを実習前のそれと比較した数値をみると、プラスに変化したのは43人、変化なしが32人、マイナスに変化したのは10人であった。少数ではあるが、マイナスに変化するケースについては、今後その理由等について把握することが課題となるであろう。

以上のように、本校における教育実習プログラムは、独自の特色である「(I) 教育実習の前に事前指導や学部の教科教育法授業の一環として本校での授業観察を経験している」「(II) 教育実習生全員で全体研究授業に取り組む」「全員が保健室勤務を経験する」ことに代表されるように、全体として教育実習生の「研究課題への意識」の高まりに効果的に機能しているといえる。大学での指導との連携をさらに深め、質的な高まりを把握していくことが今後の課題である。

### 引用・参考文献

東京学芸大学附属小金井中学校研究部(1986)。「教育実地研究カリキュラムの開発と評価の研究—1年次報告」, 東京学芸大学附属小金井中学校『研究紀要』第24号, pp.3-15

東京学芸大学附属小金井中学校研究部(1987)。「研究の経緯と概要」, 東京学芸大学附属小金井中学校『研究紀要』第25号「教育実地研究カリキュラムの開発と評価の研究—2年次報告」, pp.5-8

東京学芸大学附属小金井中学校研究部(1989)。「研究の経緯と概要」, 東京学芸大学附属小金井中学校『研究紀要』第27号「教育実地研究生指導のカリキュラムとその実践」, pp.5-10

東京学芸大学附属小金井中学校研究部(1991)。「研究の経緯と概要」, 東京学芸大学附属小金井中学校『研究紀要』第28号「教育実地研究生指導のカリキュラムとその実践」, pp.3-6